編集後記

なんだかんだといいながら、実を言えば思いの外に『デュナミス』の完成は早かった。これはLaTeXによって組版したが、専らこれに当たってくれたのは、博士課程の越智君である。労を多としたい。この第1号は講座の全員が執筆したという点でも、画期的なものであるといえる。なお英文のチェックに当たって下さったのは、今年から助教授として当講座にお迎えしたレオン先生である。

執筆して下さった湯浅先生は、企画の段階で当講座の助手であったが、今年から姫路独協大学に講師として御栄転になった。代わって当講座の助手としてお迎えしたのが、李先生である。奇しくもここで新旧の助手が、共同して執筆に参加したことになる。

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずというが、人が変わってもこの雑誌が引き続がれ、益々発展する象徴ともなり、慶賀すべきことであるといえよう。今後の発展を祈るのみである。

「総合人間学部広報」*No. 18*　*1997*年*12*月。

近頃思うこと

34年の月日がこの洛北の一角で過ぎてしまった。最初のうちはこのキャンパスもかなり牧歌的であったが、学生が増え、職員が減って時間のみが加速しつつある。特に最近はコンピューター、特にネットワークに伴うさまざまな技術の革新はすざまじく、時間はますます早くなっていく。特にいわゆる情報に関係する人々の数が急増し、その勢いは当たるべくもないように見受けられる。人文科学も、社会科学も、皆情報の観点から総合化できるという主張も、少数の情報関係者の意見ではないようである。今や図書館は電子化し、限られた空間で多くの情報を蓄えることができ、それを殆ど瞬時に取り出すことができる。どこにいても